

史料

「法蓮寺堂再建記木札」と応永一四年の地震

東京大学地震研究所・地震火山史料連携研究機構* 加納 靖之
京都大学防災研究所附属地震予知研究センター** 大邑 潤三[†]
京都大学大学院理学研究科** 山村 紀香^{††}
立命館大学大学院文学研究科*** 濱野 未来

“Hourenji Do Saikenki Kifuda” and Earthquakes Occurred in 1407 and 1408

Yasuyuki KANO

Earthquake Research Institute, The University of Tokyo
Collaborative Research Organization for Historical Materials on Earthquakes and Volcanoes,
The University of Tokyo, 1-1-1, Yayoi, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0032, Japan
E-mail: ykano@eri.u-tokyo.ac.jp

Junzo OHMURA

Research Center for Earthquake Prediction, Disaster Prevention Research Institute,
Kyoto University, Gokasho, Uji, Kyoto, 611-0011, Japan

Norika YAMAMURA

Graduate School of Science, Kyoto University, Gokasho, Uji, Kyoto, 611-0011, Japan

Miki HAMANO

Graduate School of Letters, Ritsumeikan University,
56-1 Toji-in Kitamachi, Kita-ku, Kyoto 603-8577, Japan

(Received March 29, 2019; Accepted May 25, 2019; published online on July 18, 2019)

§1. はじめに

既刊の地震史料集（例えば、『新収日本地震史料』）には、自治体の歴史について編さんした書物（自治体史）から採用された地震記事が多数収録されている。地震史料集では、通史編での歴史を描いた部分のほか、資料編などとして掲載されている翻刻文のうち地震に関する記述をそのまま引用して収録している場合が多い。

自治体史の多くは出版されており、図書館などで閲覧

できる。また、史料の翻刻や解説が掲載されており、地震記事を容易に見つけることができるほか、史料の素性や、記者あるいは所蔵者、伝来の過程など、地震史料としての解釈のための参考となる情報が書かれている。一方で、自治体史の記述のなかには、史料批判の有無や程度、あるいは、翻刻の正確性などに問題があるものも含まれており、歴史地震に関する情報源として利用する際には、十分な注意が必要であることも指摘されている

* 〒113-0032 東京都文京区弥生 1-1-1
** 〒611-0011 宇治市五ヶ庄
*** 〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

[†] 現所属：〒113-0032 東京都文京区弥生 1-1-1 東京大学地震研究所
^{††} 現所属：〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通 1-5-2 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター 資料室

[例えば、石橋 (2009)].

本稿では、自治体史から採用された地震史料の再検討の具体例として、京都府の久御山町史に掲載されている「法蓮寺堂再建記木札」を検討する。

§2. 応永一四年の二つの地震

宇佐美・他 (2013) では、応永一四年に二つの地震を挙げている。番外で、「1407 II 21 (応永 14 I 5) 京都強震。被害はなかったか」としている地震 (以後、一月地震とする) と、059 番で、「1408 I 21 (応永 14 XII 14) 紀伊・伊勢」「京都久御山町宝蓮寺¹の諸堂破壊すという。熊野本宮の温泉の湧出 80 日間止まる。熊野で被害ありしという。紀伊・伊勢・鎌倉に津波があったようである。史料の信憑性に問題なしとせず」としている地震 (一二月地震とする) である。一月地震については、飯田 (1986) が紀州の地震としており、山本 (1989) は京都の地震と結論づけている。なお、久御山町は京都盆地の南西部に位置し、法蓮寺の推定地点 (現在の久御郡久御山町佐古付近) と現在の京都市役所は約 15km 離れている。

「[古代・中世] 地震・噴火史料データベース (β版)」[石橋 (2009), 古代中世地震史料研究会 (2017)] では、一月地震は「17~18 時頃に京都で近年になく強い地震の揺れを感じた。」とし、一二月地震は、「17~18 時頃に京都で地震の揺れを感じた。それ以外の地震記事には問題がある。(参考: 山本・萩原 (1989) in 『続古地震』 p. 250)」としている。いずれも京都における「基本史料」(同時代史料) を重視した解釈である。なお、古代中世地震史料研究会 (2017) では史料自体の信頼性を評価する簡便な指標として 5 段階 (A-E) の史料等級を提案しており、A を「基本史料 (同時代史料)」としている。

§3. 「法蓮寺堂再建記木札」の内容とその再調査

一二月地震について宇佐美・他 (2013) が久御山町での被害に触れているのは、『久御山町史 第 1 巻』[久御山町史編さん委員会 (1986)] の記述にもとづいたものと想定される。この記述が久御山町での一二月地震に関する唯一のものであるからである。『久御山町史 第 1 巻』は、「法蓮寺堂再建記木札」の記述をもとに、「応永十四年 (一四〇七) 十二月の地震で」寺に被害があったとしている。この地震での被害およびその後の再建の経緯を説明した文章が、『新収日本地震史料 続補遺』[東京大学地震研究所 (1993)] 12・13 ページに収録され、宇佐美・他 (2013) の記述につながっている。ここで注意しておきたいのは、旧暦と西暦とでの 1 年の期間が対応しないこと

¹「法蓮寺」と「宝蓮寺」は同一の寺である。現存はしない [久御山町史編さん委員会 (1986)]。

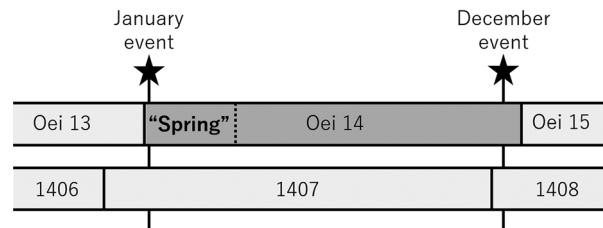


Fig. 1. Relationship between old Japanese calendar (top horizontal bar) and Julian calendar (bottom horizontal bar). Timing of two earthquakes (vertical lines with stars) and "spring" of Oei 14 are also indicated.

である (Fig. 1)。応永一四年十二月一日は 1407 年 12 月 30 日であり、「応永十四年十二月」のほとんどは 1408 年となる。『久御山町史 第 1 巻』は日まで書いていないが、『新収日本地震史料 続補遺』の解釈のように、一二月地震に言及したものとすると「応永十四年 (一四〇七) 十二月の地震」というのは旧暦と西暦で矛盾する。

そこで、応永一四年に発生し、京都に地震記事の残る二つの地震について再検討するため、「法蓮寺堂再建記木札」の現物 (称名寺所蔵, Photo 1) と久御山町が町史の編纂史料として保管している「法蓮寺堂再建記木札」の写真、および、『久御山町の社寺』[久御山町郷土史会 (1976)] に掲載されている全文翻刻を調査した。いずれも法蓮寺の堂などに被害を及ぼした地震についての記述は次のようになっている。

(前略) 然応永十四丁亥季

春罹于地震之災而諸堂諸像或破壊也 (後略)

ただし、「季」が木札の下端になるため改行され、「春」は次行の冒頭になっている (Photo 1)。この部分の意味は、「ところで応永一四年季春に地震の被害で多くの堂と多くの仏像で破壊されたものがあつた」となる。地震は応永一四年の「季春」に発生したものである。「季春」とは旧暦三月を指し、1407 年 4 月 8 日から 5 月 7 日に対応する。したがって、この記述を応永一四年一二月の地震のものとする解釈は間違いである。この間違っ了解は、『久御山町の社寺』の翻刻とともに記された解説でなされたものであり、『久御山町史』に引き継がれている。「季春」という記述を見逃して、「応永十四」という記述だけから応永一四年一二月の地震と結びつけた結果、この地震による被害との記述をしてしまったのだろう。『久御山町の社寺』にも『久御山町史』にも十二月地震と判断した根拠や出典は明示されていない。『久御山町の社寺』には全文が翻刻されているので、これを注意深く検討していれば、応永一四年三月の地震との解釈が可能だったと思われる。しかしながら、一二月地震のほ

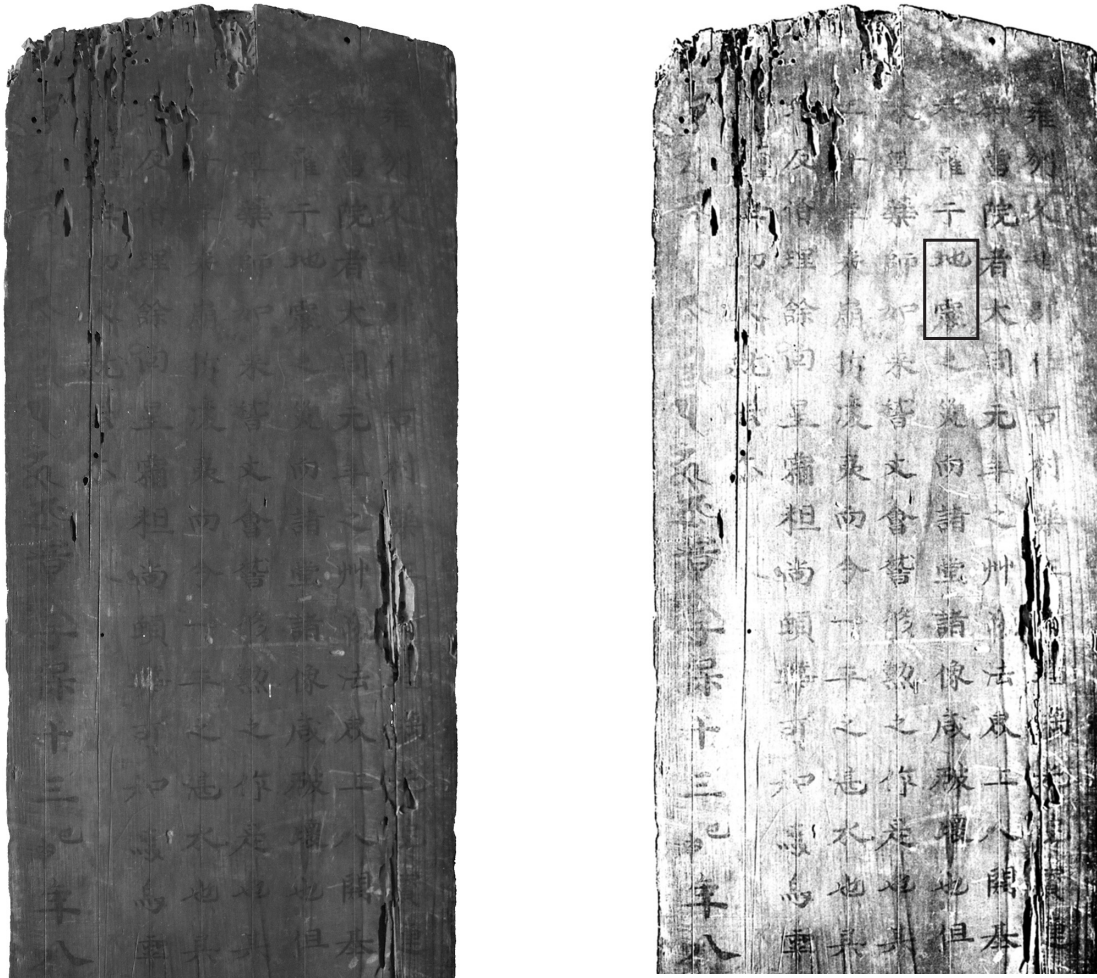


Photo 1. (left) Upper part of “Hourenji Do Saikenki Kifuda,” (wooden plate describing reconstruction of the Hourenji temple). (right) Processed image to emphasize inked characters. The word “earthquake” is indicated by rectangle.

うが広く知られていたために誤解に気づかなかったのではないか。

この「法蓮寺堂再建記木札」は、末尾の年記によれば、1407年の地震から300年以上経過した享保一三年（1728年）に作成されたものであり、それまでの史料あるいは伝承をもとに書かれたものと考えられる。この木札は同時代の史料ではなく、古代中世地震史料研究会（2017）の史料等級でいえば、B（上位から2番目）の「参考史料（主として近世までに成立した史料）」に相当し、「適切な史料批判を行うことによって、研究に活用できると判断されるもの」とされる。原田・他（2017）は、明応七年六月十一日（1498年6月30日）の巳刻の日向灘大地震について、唯一の根拠である『九州軍記』にある大被害の記述や成立過程を詳細に検討し、その信憑性が極めて低いことを明らかにし、この地震の存在を否定した。「法蓮寺堂再建記木札」の記述を地震発生の証拠とするに

は、その信頼性を十分に検討する必要がある。

それでも、この木札の記述から一二月地震によって久御山町で被害が発生したと解釈することはできず、宇佐美・他（2013）の記述は不適切である。一二月地震は「17～18時頃に京都で地震の揺れを感じた」程度の地震であるとする「[古代・中世]地震・噴火史料データベース（β版）」[石橋（2009）、古代中世地震史料研究会（2017）]による解釈とは矛盾しない。

応永一四年の三月に発生した地震は知られておらず、既刊の地震史料集にも他の史料は見あたらないが、応永一四年の三月にも地震があったという解釈もあり得る。いっぽう、木札を作成する際に、「季」や「季」（「年」の異体字）を「季」と写し間違えたのかもしれない。この解釈によると、一月地震の被害を記述したものとして差し支えない。

§4. ま と め

「法蓮寺堂再建記木札」は1408年に発生した地震（一二月地震）の史料とされてきたが、1407年に発生した地震（一月地震または未知の三月に発生した地震）のものとすべきである。

謝 辞

「法蓮寺堂再建記木札」（称名寺所蔵）と久御山町史の編纂資料を閲覧させていただきました。「季春」の解釈には榎原雅治氏との議論が参考になりました。匿名の2名の査読者と編集委員の室谷智子氏からの貴重なコメントにより本稿は改善されました。記して感謝いたします。本研究の一部は、文部科学省による「災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画」の支援を受けました。地震史料集の閲覧には「東京大学地震研究所図書室特別資料データベース¹」、地震史料集の検索には「歴史地震史料検索システム²」[山中(2015)]、和暦と西暦の変換には「HuTime³」[関野(2014)]の暦変換サービスを利用しました。

文 献

原田智也・西山昭仁・佐竹健治・古村孝志, 2017, 明応七年六月十一日(1498年6月30日)の日向灘大地震は存在しなかった——『九州軍記』の被害記述の検討——, 地震2, 70, 89-107, doi:10.4294/zisin.2016-13.

飯田汲事, 1986, 歴史的被害地震補遺—a. 元治元年閏2月1日(1124年3月25日)の尾張の地震—b. 応永14年1月5日(1407年2月21日)の紀州の地震—, 歴史地震, 2, 1-7.

石橋克彦, 2009, 歴史地震史料の全文データベース化, 地震2, 61, S509-S517, doi:10.4294/zisin.61.509.

古代中世地震史料研究会, 2017, [古代・中世] 地震・噴火史料データベース(β版), 最終更新日2017年3月15日, <<https://historical.seismology.jp/eshiryodb/>>, (参照2019-3-5).

久御山町郷土史会, 1976, 久御山町の社寺, 101 pp.

久御山町史編さん委員会(編), 1986, 久御山町史, 第1巻, 1022 pp.

関野 樹, 2014, 時間情報システム, 総合地球環境学研究所(編)地球環境学マニュアル2, 朝倉書店, 116-117.

東京大学地震研究所(編), 1993, 新収日本地震史料, 続補遺, 1043 pp.

宇佐美龍夫・石井 寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子, 2013, 日本被害地震総覧599-2012, 東京大学出版会, 724 pp.

山本武夫, 1989, 訂正を要する諸地震 四 応永十四年(一四〇七)一月五日の地震, 萩原尊禮(編)「続古地震」, 東京大学出版会, 285-288.

山中佳子, 2015, 新収日本地震史料および拾遺のDB化とその検索システムの作成, 歴史地震研究会講演予稿集, O-24. (山中佳子, 2016, [講演要旨] 新収日本地震史料および拾遺のDB化とその検索システムの作成, 歴史地震, 31, 205に再録)

¹ http://www.eic.eri.u-tokyo.ac.jp/dl/meta_pub/G0000002erilib (参照2019-3-5)

² <http://www.seis.nagoya-u.ac.jp/HistEQ/> (参照2019-3-5)

³ <http://www.hutime.jp/basicdata/calendar/form.html> (参照2019-3-5)